

観世音寺

観世音寺は大森の目印で、丘の上の中心部から何世紀にもわたって町を見守ってきました。この真言宗寺院の歴史は中世にさかのぼりますが、1800年にこの町の大半を焼失させた火事で観世音寺の建物と記録が失くなってしまったため、この寺院が創建された日付は不詳です。この寺院は、江戸時代（1603-1867）に石見銀山で幕府の代理を務めた大森代官が正月になると銀山の繁栄を祈願するために訪れた3箇所の霊場のうちのひとつです。これは、観世音寺が代官所の寵愛と保護を受けていたことを示しています。しかし、1800年の火災後の再建には時間がかかり、現在の本堂は1800年代後半に建てられ、また、観世音寺の特徴的な赤い山門が現在の場所に建てられたのは、近くの名刹、清水寺から移築された1878年（明治11年）でした。門の脇には、1980年に追加された一对の武者の石像があります。

丘の上の門へと続く階段の下には、医学と治癒の仏、薬師〔如来〕に奉納された、屋根の付いた石板があります。この石には、目の病気を平癒させる力があると信じられています。石板の裏手にある丘をずっと上に登っていくと、道行く人々を見守るように小さな仏像が多数設置されています。